産経新聞　朝刊　和歌山版　2023年6月4日

くじら日記

太地町立博物館から

韓国・長生浦旅行記 ①

クジラの恵みで繁栄

今年5月11日、韓国南東部に位置する蔚山（ウルサン）広域市南区（ナム）の祭典「2023蔚山クジラ祭り」が幕を開けました。長生浦（チャンセンさ）クジラ文化特区を舞台とし、「跳躍する長生浦」をテーマに、盛大な式典をはじめライブやパレードなどが4日間にわたり開かれました。

鯨類の学術研究と教育を目的に南区と協力関係を結ぶ太地町は、クジラ祭りを通しても交流を深めています。筆者は昨年に続き、2回目の招待を受け、訪問しました。

関西国際空港から飛行機で1時間半かけて、韓国第2の都市である釜山の金海（ちょうへ）国際空港に降り立ちました。出迎えてくださったのは南区職員のチャン・ヘジンさんと、通訳兼ガイドのキム・ギョンスクさんで、約半年ぶりの再会でした。クジラ祭りの開催地まで、車で案内してもらいます。

蔚山広域市に入ると、高層マンションが目立ちました。人口は110万人を超えるといいます。また、広大な敷地に立地する製油所や自動車工場も見られ、韓国を代表する工業都市であるともいいます。

「2023蔚山クジラ祭り」のパレード（韓国・蔚山広域市南区提供）

1時間ほどかけて移動し、開催地である長生浦にたどり着くと、今までの景色が一変。クジラのモニュメントが数多く飾られ、イルカが描かれた遊覧船やクジラ料理ののぼりも見かけます。まるで、和歌山の国道42号からクジラ一色の太地町に踏み入ったときのようでした。

長生浦とクジラとの関わりは1890年頃までさかのぼります。ロシアとともに捕鯨基地をつくり、クジラの解体作業を行ったことが始まりで、その後、捕鯨は発展の道をたどったそうです。以来、1986年に国際捕鯨委員会（IWC）によって商業捕鯨が禁止されるまで捕鯨が行われ、「犬も1万（ウォン）札をくわえて歩く」と言われるほど町が栄えたといいます。

捕鯨最盛期の1960年～70年代の長生浦の村の様子が再現された「鯨文化村」では、当時のクジラ解体の様子やお札をくわえた犬も見ることができ、クジラとともに生きる長生浦の暮らしを知ることができます。

翌日、南区庁を訪問しました。区長室には、南区の同じ場所で撮影された2枚の写真が飾られていました。1枚は、2014年に撮影された大都市となった南区。別の1枚は、民家と田畑が広がる開発が進んでいない1970年のものです。ソ・ドンウク区長に、町はクジラで栄えたのか尋ねると、「工業や輸出など理由はさまざまだが、栄えた理由の一つにクジラもあっただろう」と笑みを浮かべました。

紀州では、古くからクジラのおかげで潤ったという意味で「鯨1頭7浦潤す」という言葉がありますが、韓国の「クジラの町」長生浦も、クジラの恵みで町が繁栄し、暮らしを豊かにしてきたことが、クジラ祭りや人々のクジラへの思いから伝わってきました。

（太地町立くじらの博物館館長　稲森大樹）

◇

原則第1日曜日に掲載します。